

軍事力と外交の英知は密接につながる

ドイツ連邦大統領府
ベルリン、2026 年 3 月 24 日

[Der Bundespräsident - Speeches - "Military strength and foreign-policy wisdom are interdependent"](https://www.bundespraesident.de/SharedDocs/Reden/EN/Frank-Walter-Steinmeier/Reden/2026/260324-Foreign-Office-75-years.html)
<https://www.bundespraesident.de/SharedDocs/Reden/EN/Frank-Walter-Steinmeier/Reden/2026/260324-Foreign-Office-75-years.html>

ドイツのシュタインマイヤー連邦大統領は 3 月 24 日、ドイツ連邦外務省創設 75 周年を記念して演説し、軍事力、外交、そして欧州の結束を融合させた現代的な外交政策を求めた。不確実性が増す世界において、ルールに基づく秩序は依然として不可欠である。（大統領府の説明）

要旨

国際秩序が揺らぐ中、ドイツ外交は根本的転換を迫られている。ロシアの侵略や米国との関係悪化により、従来の外交基盤の多くが崩れ、欧州の結束と自立が最重要課題となった。軍事力強化と外交的知恵は相互依存であり、欧州は軍事・技術面で自立しつつ、国際法と多国間主義を堅持すべきだ。また、中堅国との協力拡大が必要だ。外交官は自信と責任を持って新時代の外交を担ってほしい。

このヴェルトザール (Weltsaal = ドイツ外務省のホール) は、なんと馴染み深い光景でしょう。その名称自体が、この省での職務 常に困難を伴い、時には過酷すぎるほどの課題 に対する確固たる姿勢と高い志を示しています。それは、世界全体を見据え続けることです。それが皆さんの仕事なのです。

ワデフルさん (連邦議会議員)、本日はご招待いただき、誠にありがとうございます。これは、私たちの友好的な協力関係の表れでもあります。また、この

由緒ある省庁の記念日を祝うとともに、職員の皆様に感謝と敬意を表する機会も与えてくれました。つきましては、この75周年を記念して、心からの感謝と祝辞をぜひお受け取りください！

連邦外務省の歴史は、まさに皆様の物語であり、世界中で我が国を代表し、75年にわたり その仕事ぶりだけでなく、人格、人間性、そして誠実さを通じて 我が国への信頼を育んできた方々の物語です。ナチス・ドイツによってもたらされた政治的・道徳的な完全な破滅の後、この新たな信頼こそが、連邦共和国の成功物語の礎であり、今もなおその礎であり続けています。

私が外相として、あるいは連邦首相府で、ドイツ連邦議会で、そしてここ10年近く連邦大統領として在任する中で、私は外交官や職員のあらゆる階層にわたり、何世代にもわたる方々を個人的に知り、その価値を深く認識する機会を得ました。皆さんのうち、少なからぬ方が私の最も親しい同僚であり友人でもあります。

連邦外務省の職員の皆様、私は、皆様にとって外交官という職務が単なる仕事以上のものだということを承知しています。この職に就くことは人生の重大な決断であり、皆様やご家族にとって、素晴らしいものであり、刺激的であり、時に容易ではないものではありましたが、いずれにせよ、わが国にとって極めて重要であり、これからもそうあり続ける生き方なのです。

連邦外務省の歴史は、皆さんがた、つまり人々によって形作られてきました。そして、これからも人々によって形作られていくでしょう。人工知能は有用かもしれませんが。例えば、膨大な数の演説原稿を作成する際などです。中には「多すぎる」と言う人もいるでしょう。もちろん、連邦大統領府もこれに一役買っています。私もその点については責任があることを認めます。

しかし、特に今、この息をのむほど激動し、極めて危険な時代において、絶え間ない政治的・技術的変革に囲まれている今こそ、私たちはあなた方を必要としています。優れた判断力、コミュニケーション能力、そして誠実さを兼ね備えた、賢明な外交官たちを。今日、多くの人が外交を弱く、重要でないものと見なしているかもしれませんが、危機や紛争に彩られたこのような時代こそ、外交は減るのではなく、より一層必要とされるのです。

この記念式典において、次世代の外交官たちが主導的な役割を担っているのを見るのは、実に喜ばしいことです。親愛なる外交官候補生の皆さん、この職業に就くという皆さんの決断に対し、私は最大の敬意を表します。特に現代の世界において、天のみぞ知るほど容易ではないこの時代に、皆さんが祖国への奉仕と外務省への道に「はい」と答えてくれたことを嬉しく思います。

私にとって 少し歴史的な余談を許していただければ 政治的な道を歩むという決断は、35年余り前に下されました。1989年までは、学界に残ることも容易に想像できました。1989年の秋、私は博士論文の最終章に取り組んでいたところ、ベルリンの壁が崩壊しました。未来は可能性に満ちており、人々は自信に溢れていました。戦後のドイツが享受した歴史的な幸運 新たな出発、経済の奇跡、和解、欧州統合、そして最終的に再統一 これらすべてが、1990年代初頭の当時、世界と未来に影響を与える、長く途切れることのない上昇トレンドを形成しているように見えました。それは、より多くの平和、より多くの自由、そしてより多くの民主主義をもたらすものでした。私たち 私自身、そしておそらくこの部屋にいる年配の同僚の何人か はこの発展の一翼を担いたいと願っていました。無邪気さからは解放され、溢れるエネルギーを持って、私たちはこの世界を築き上げ、日々少しずつより良いものにし、その過程でドイツが経験した幸運の一部を世界に分け与えたいと願っていたのです。

現在との対比は、これ以上のものはないほど鮮明です。自信は極めて稀なものとなり、特にここ、ヨーロッパの中心地においてはなおさらです。**私たちの周囲の世界は、日々、少しばかり危険で残酷な あるいは少なくとも非合理的なものへと変貌しているように見えます。そして、私たちが維持に努める国際秩序が日々崩壊していくのと同様に、私たち ドイツ は世界舞台においてますます傍観者に追いやられているようです。率直に言えば、世界政治の行方に衝撃を受けるほど、私たちはそれに対して何もできなくなっているのです。「今後、我々は依然として外務省を必要とするのだろうか？」 これが、本日のイベント第2部における議論の導入となる問いです。これは記念式典の場で投げかけるには大胆かつ率直な問いであり、そもそも問わなければならないという事実自体が懸念を喚起するものです。**

イヴァン・クラステフ（ブルガリア出身の政治思想家）は最近、ドイツが現在抱える問題は、逆説的ですが、戦後政策の失敗ではなく、むしろその成功に起因していると指摘しました。まさに我々は、第二次世界大戦から得た教訓を永遠に心に刻み、とりわけヨーロッパでの戦争などもはや想像できないと思い込んでいます。まさにこのために、国際法が踏みにじられ、多くの方は、イラク戦争・リビア・アフガニスタンといった最近の戦争ですら記憶が薄れているなかで、ドイツは力による政治の復活に対処するのに苦労しています。

要するに、ドイツの外交政策は根本的な再構築を迫られています。我々は世界に対する認識の地図を書き換える必要があるのです。

この歴史的に困難な時代において、ここに集まった尊敬すべき職員の皆様、そして在外公館の多くの同僚の皆様は、我が国に奉仕しておられます。状況は1951年や冷戦時代とは当然ながら全く異なりますが、戦略的な課題の大きさは、75年前に連邦共和国への信頼を築く新たな平和的な外交政策の道筋を模索し始めた人々にとっての課題に、決して劣らないかもしれません。

なぜ私がこのような根本的な転換について語るのか。連邦外務省の再設置後、西ドイツの外交政策の最初の数十年間を定義づけたのは、四つの礎石でした。第一に、ドイツの分断とその克服。第二に、西側諸国との統合。第三に、欧州統合。そして第四に、我々の大陸の東側との関係と対話です。

2026年の状況を冷静に評価すれば、これら4つの柱のうち3つは、少なくとも当面の間は押し流されてしまったのは明かで、唯一残った柱である“欧州の結束”が、これまで以上に重要になっています。

戦略的な全体像を簡潔にのべましょう。ドイツ問題（東西分断の問題）は、長いあいだ未解決のまま両ドイツを悩ませてきましたが、1990年以降は国際法の中で最終的に解決されました。さらに、東ドイツ出身の優れた同僚たちが加わったことで、私たちの陣容は強化されました。国内の統一（社会の統合）は、今もなお私たちの社会にとって大きな課題ですが、しかし幸いなことに、それはもはや外交政策の課題ではありません。

西と東という礎石、すなわちワシントンやモスクワとの関係は、過去数十年にわたる歴代のドイツ政府を悩ま続けてきましたが、この時代は特に二人の名前、二人の首相と深く結びついています。若き連邦共和国を西側同盟の中に確固たる位置づけをしたコンラート・アデナウアーと、当時「新東方政策」として知られるようになった取り組みを開始したヴィリー・ブランドです。ところがいまこれら二つの礎石は、これまで想像もできなかった形で崩れ去ろうとしています。

ロシアによるウクライナへの侵略戦争は、欧州の安全保障秩序のあらゆる原則を根本から打ち砕きました。鉄のカーテンの崩壊後、ロシアと共に「共通の欧州の家」を築こうとする取り組みは、この省庁と、私を含む何世代もの政治家を、数十年にわたり占めてきました。50年以上前のCSCE（欧州安全保障協力会議）の初期段階から、ドイツ再統一やEUの東方拡大という幸先の良い成果に至るまで、小さな一步を積み重ねる政策、すなわち対話と力、抑止と緊張緩和を組み合わせた政策がいかに成功し得るかを、結局のところ私たちドイツ人が自らの目で見てきたからこそである。だからこそ、私たちは長きにわたり粘り強くこうした努力を続けてきた。そして今日、その努力が長すぎたことを痛感している。キエフの門前にロシアの戦車が迫る中、これらすべての努力は瓦礫と化し、ウクライナに恐ろしい戦争が解き放たれた。戦争が終わった後も、私たちはこのロシアとの「平和」に焦点を当てることはできず、むしろ「紛争の可能性」をどう捉えるかに注力せざるを得ないだろう。言い換えれば、欧州は今や、ロシアと共にではなく、ロシアに対する安全保障を構築しなければならない。

トランプ大統領の2期目開始以来、大西洋横断関係に生じた亀裂も、これと同様に深い。したがって、私は現代を「二重の画期的な転換」が特徴づけられている時代と呼ぶ。それは、モスクワとワシントンで起きていることが同じであるとか、比較可能であるからではない。両方の転換が、我々の外交政策に根本的な変革を強いているからだ。

2022年2月24日以前の関係に、ロシアとの関係が決して戻ることはない。私が信じているのと同様に、大西洋横断関係についても、2025年1月20日以前の状態へと時計の針を戻すことはできないと考える。亀裂は深すぎ、米国

の大国政治に対する信頼の喪失は甚大すぎる。それは同盟国間だけでなく、世界中で同様だ。「友好的な覇権国」の時代、そしてリベラルな国際秩序（民主主義をもたらしたその秩序）への保証があった頃のような関係に、将来の米政府でさえ、単に再始動させることはできないだろう。

ロシアに関しては、ドイツは過度な依存がいかにか我々を脆弱にするかを痛感する苦い経験をした。我々は、事実上一夜にして、ロシアとの長年にわたるエネルギー関係を解消せざるを得ず、その過程で多大なコストを被った。当時、相互の合理性と有効な契約に基づいていたこれらの関係は、1970年の最初の「パイプ対ガス」協定に遡り、数十年にわたって築かれ、深められてきたものであった。

大西洋横断関係においても、我々は自国を脆弱にする依存関係から脱却しなければならない。これは何よりもまず、安全保障と技術の分野に当てはまる。防衛と技術における欧州の主権を確立することは、今日の午後だけで片付くようなものではない。むしろ、完成までに数世代を要するプロジェクトである。しかし、その課題の大きさを理由に、我々も欧州のパートナーも、もはや行動を先送りしてはならない。

ドイツ連邦軍は、欧州における通常戦力防衛の基幹となる必要があります。連邦政府は2022年2月24日以降、そのために必要な決定を下してきました。しかし、これを成し遂げるためには、連邦軍には政治的支援だけでなく、社会全体の全面的な支援が必要です。つまり、十分な資金、近代的な装備、そしてより多くの人員を確保しなければならないということです。志願制だけでは不十分な場合、私たちは徴兵制に基づくモデルに戻らなければなりません。私は、全員に対する義務的な公共奉仕が最善だと考える。ある者は連邦軍に、またある者は社会福祉機関に配属される形だ。

技術の分野においては、米国への依存度はさらに高く、我々はそれを容認する姿勢をますます強めてはならない。結局のところ、技術における主導権は、外交上の力となるだけでなく、デジタルプラットフォームやソーシャルメディアを利用して国内政策に影響を及ぼす力にもなることを、我々は知っているからだ。昨年ミュンヘンで、米国政権がまさにそれ、すなわち自由で団結した欧州を弱体化させることに固執していることを、我々は面と向かって告げられた。

おそらく、Anthropic 社と米国防総省の間の現在の対立は、欧州にとっての警鐘、あるいは好機となり得るだろう。欧州はテクノロジーの拠点として多くの強みを備えている。人材があり、市場があり、機会がある。しかし同時に、倫理基準も持っている。これらが、我々が築き上げるべき 4 つの柱である。

ここで、我々の外交政策の礎に戻ろう。私はアデナウアーと西側諸国との統合について言及した。今日、西側諸国との統合とは何を意味するのか？ それは現代における難問の一つであり、この省が答えを見出さなければならない問いである。

75 年にわたり、我々は米国と、時折の意見の相違はあるものの、緊密なパートナーシップを築いてきた。これにはイラク戦争をめぐる重大な意見の相違も含まれていた。しかし、我々は常に、意見の相違を解決し、立ち返ることができる共通の基盤を持っていると断言できた。今日、これはもはや当てはまらない。西側世界は この点については強調しておきたい 依然として貴重な規範的理想である。だが、西側世界は現在、政治的現実としては存在していない。

だからこそ、外交政策における現実主義とは、今や我々が自らを欺いてはならないことを意味するのだ！ダボスでマーク・カーニーが、店先のショーウィンドウに掲げられたヴァーツラフ・ハヴェルの看板に言及した際、彼が示唆したのはまさにこの点であった。

現実主義とは、この米国政権との関わりにおいて我々が実利主義的であり、我々の核心的利益に焦点を当てなければならないことを意味する。しかし、この現実主義は同時に、他者の見解に屈してはならないということでもある！現在の米国政権は、我々とは異なる世界観を持っている 確立されたルールや、パートナーシップ、長年にわたる信頼を顧みない世界観だ。我々はそれを変えることはできない。それは我々が対処すべき状況である。しかし、我々が自らこの世界観を取り入れる理由はない。

ルールなき世界において、大国は生き残れるかもしれない。実際、短期的には利益を得る可能性さえある。だが、それは我々には当てはまらない。また、それは圧倒的多数の国々にも当てはまりません。結局のところ、それこそが今日

私たちに必要な架け橋となるはずです！これは、私たちを数多くの他の人々、とりわけ世界中の新興中堅国と結びつけてくれます。

私が連邦大統領に就任して以来、私はこれらの中堅国との接触を図ってきました。毎日ニュースの見出しを飾るような国々ではありませんが、戦略的に私たちに多くのものを提供してくれる国々です。そして、その逆もまた然りであると私は確信しています。

外務省および在各国のドイツ大使館の皆様からの素晴らしい支援と協力のおかげで、私は ASEAN 地域、湾岸諸国、トルコ、ケニア、南アフリカ、チリ、ブラジルへ数え切れないほど多くの訪問を行うことができました。つい先週も、メキシコとその近隣諸国を再訪し、決して単なる大国の裏庭ではないこの地域とのパートナーシップを強化しました。

これらの中堅国はすべて、私たちと同様に依存関係を減らし、パートナーシップを幅広い基盤の上に築きたいと考えているため、私たちとの接触を求めています。これらの国々は、私たちの見解や利益のすべてを共有しているわけではありませんが、未来の世界が米国と中国の二強対決に留まるべきではないという、極めて重要な目標を私たちと共有しています。しかし、それこそが、これらの国々が、国際ルールや、一部の国だけでなくすべての人々の利益となる秩序の安定化において、我々がどのような役割を果たしているかを、非常に注視している理由でもある。

そのため、私は、我々の外交政策は現実的かつ説得力のあるものでなければならないと確信している。そして、そうでない場合は、そうなるよう努めなければならない。

しかし、これは国際法を放棄することを意味するものではない。国際法違反をそのように指摘しなければ、我々の外交政策の説得力が高まるわけではない。我々はすでにガザ戦争においてこの問題に対処せざるを得なかったし、イラン戦争においても対処しなければならない。なぜなら、私はこの戦争が国際法違反であると信じているからだ。その点については疑いの余地はほとんどない。米国に対する差し迫った攻撃の正当化が成り立たないという事実は、米情報機関の一部でも同様の見解であったようだ。さらに、この戦争は政治的に致

命的な過ちであり、私が最も苛立たしく思うのは、もしその目的がイランの核兵器保有への道を阻止することだったならば、これは真に回避可能で不必要な戦争だったという点だ。核合意はすでに我々に多大な進展をもたらしていた。2015年7月14日のJCPOA署名後ほど、イランの核兵器保有から遠ざかっていた時期はない。当省の多くの人々が、この合意の実現に向けて長年にわたり懸命に尽力してきた。署名式で、この瞬間の歴史的意義を過小評価してはならないと述べたのは米國務長官であった。「この合意によって」と彼は主張した。「我々は、米国がイランに対して戦わなければならなかったであろう戦争を防いでいるのだ」と。

トランプ大統領は、最初の任期2年目に米国をJCPoAから脱退させ、現在、2期目の任期において、まさにその戦争を遂行している。

連邦外務省の諸君、国際法とは、他者が脱ぐからといって我々も脱ぐべき古い手袋のようなものではない。それどころか、大国の一員とは数えられないすべての者にとって、国際法は不可欠なものである。

たとえ一部によって無視され、あるいは侵害されたとしても、国際法は、規制の枠組み、ルールブック、そして正当性の源泉としての重要性を、ドイツにとっても、ひいては欧州にとっても、何ら失ってははいない。欧州連合（EU）そのものが法と規則の上に築かれている以上、法と規則のない世界において、この欧州は立ち行かなくなるだろう。もし我々が「力こそがすべて」という世界観を採用すれば、欧州はカードの家のように崩れ去るだろう。

ここで、先ほど触れた4つの歴史的礎石の話に戻る。そのうち3つは失われてしまった。だからこそ、この礎石 欧州の結束 は、これまで以上に緊急の課題となっている。結束し、強靱な欧州は、もはや単なる過去の約束ではなく、現在の地政学的必然である。

欧州委員会委員長は最近、欧州対外行動局の職員に対し、欧州は大国であるべきだと明言した。大言壮語だ！これが現実的かどうかについては、私は気にしていません。むしろ、ヨーロッパがどのような力になりたいのかという問いの方に、はるかに強い関心を持っています。

冷酷さを是とする時代の風潮に迎合してしまっただけでは、ヨーロッパは強くなれません。この時代の風潮に立ち向かってこそ、私たちは強くなれるのです！私たちは軍事的に強くならなければなりません。はるかに、はるかに強くならなければなりません。しかし、それだけでは不十分です。私たちを強くしてきたものを、さらに強化しなければならない。統一された欧州が繁栄、平和、自由、そして文化的魅力を享受できているのは、私たちが配慮を示しているからだ。配慮を示すことこそが、欧州の DNA の一部だからだ。互いへの配慮、対立する利害とその解決への配慮、法と規則への配慮、歴史と各国の背景への配慮。この欧州的な「反射神経」を保ち続けよう。そして、ここ外務省の皆さん以上に、それを実践できる者はいないだろう。

私はちょうど 70 歳になったばかりだが、老いには多くの利点はないかもしれないが、確かにいくつかはあると言える。その一つは、短命な政治やメディアのトレンドに直面しても、多少は気楽になれるということだ。私が初めて外交に関わり、後にその形成に携わる光栄に浴した 1998 年以降の期間だけでも、我々の外交政策に対する評価は、驚くべきほど振り子のように揺れ動いてきた。困難な国々との外交が不適切と見なされた時代、軍事的な事柄はすべて疑わしい、あるいは誤りであると見なされた時代、装甲輸送車の車輪のネジ一本ひとつまでが『軍事装備輸出報告書』で具体的に正当化されなければならず、それでもなお容赦ない批判を浴びた時代を、私は覚えています。2014 年にウェールズで NATO の 2% 目標を支持した際、国内でのこの目標に対する支持は微々たるものでした。ドイツは軍事力なしに平和の担い手でありたいと望み、知的な外交によって世界を形作ることを目指していた。

今や振り子は反対方向に振れている。国際法に言及するのはナイーブだ、外交では何も変わらない、文化交流政策など必要ない、軍事力こそが唯一重要なのだ、と人々は言う。軍事力を基盤とする勇敢な外交・安全保障政策において、古典的な外交を「弱々しい一要素」として切り捨てるメディアの論評を読むと、時として目を疑うほどだ。

今こそ、軍事力と外交的知恵の関係について、成熟した姿勢を確立すべき時である。それは他国では当然と見なされている姿勢、すなわち、軍事力は外交的知恵なしには存在し得ないという姿勢である。

外交官の皆さん、どうか羅針盤を見失わないでほしいと心から願っています！ドイツの外交政策には常に四つの柱が必要であることを、皆さんはご存知でしょう。私たちが真剣に受け止めてもらうための軍事力、解決策を見出し同盟を築くための賢明な外交、外の世界を惹きつけるためのソフトパワー　すなわち文化、ビジネス、科学　そして枠組みと方向性を提供する国際秩序です。

今日、世界の政治地図が書き換えられようとしている今、この羅針盤を見失わないよう強く訴えます。外交官として、自信を持つべきですが、傲慢になってはなりません！自信を持つべき理由は山ほどあります。連邦外務省の75年の歴史には、数多くの手本となる存在がいます。困難な政策と職員の歴史を抱えたこの省を、新たな民主的な道へと導いた最初の職員たち。徹底した男性優位の体制に割り込むことに成功した、エリノア・フォン・プットカマーのような最初の女性たち。世界史の証人たち　例えば1989年、プラハの西ドイツ大使館敷地内で、ゲンシャーが演説を行ったバルコニーの下で、何週間にもわたり数千人の東ドイツ人を世話した人々；あるいは、その1年後、長時間にわたる交渉の末、「2プラス4会談」においてドイツ統一という幸運を築き上げた東西の同僚たち；戦争や紛争の影響を受ける世界各地の拠点で活動する危機管理担当者たち　1990年代のボスニアでの輸送隊から、カブール空港での衝撃的な瞬間、そして残念ながら現在再びウクライナや中東で直面している状況に至るまで；そしてもちろん、2020年の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックの初期に、世界中から25万人のドイツ人を帰国させた一方で、自分たちは何週間も自宅に帰ることさえほとんどできなかった人々など、多くの献身的な職員たち。

外交官としてこれほど多大な献身と情熱を注いでいる皆さん、そしてすべての方々に感謝します。

外務省の皆さん、私を含め、誰一人として、未来の世界がどのような姿になるかを知る者はいません。私が知っているのは、1990年代や19世紀に戻ることは決してないということだけです。ドイツは歴史的な世界的な出来事の中には立たないでしょうが、必然的に脇に追いやられることもありません。私たちが今直面しているこの地政学的な局面に対して、歴史的な青写真は存在しないのです。外交官として働くには、なんと刺激的な時代でしょう！これほど頻

繁に自らを刷新してきた組織なら、再びそれを成し遂げることができるはずで
す。そして、必ず成し遂げましょう！そして、自らの羅針盤を信じてくださ
い！